

---

# 君とあなたと私の間から

日向 銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君とあなたと私の間から

### 【Nコード】

N3786C

### 【作者名】

日向 銀

### 【あらすじ】

喧嘩ばかりの幼なじみ3人。高校2年になって、どんな事が起こるのか。3人の友情は…？3人の恋の行方は…？淡い高2の物語。

## 第1話：喧嘩仲間

「ふあゝ。」

眠い、眠い、眠い！

今日の夢は最悪。

あの2人と喧嘩してる夢。

しかも殴り合いの。

なんでこんな夢見ちゃったんだろ…。

私には幼なじみが2人いる。

…前言撤回。

私には喧嘩友達が2人いる。

いつも喧嘩する奴らが。

名前は仁。阿波来 仁。（あばらい じん）

それから風真 白。（ふうま はく）

家が両隣で、物心ついた時には常に2人と一緒だった。  
言わば、兄弟みたいな存在。

そして私の今の悩み。

もっと青春したい。

楽しい人生送りたい。

みんな言うの、

あんたは男っぽすぎる！  
って。

2人といえるから、私は男みたいになっちゃおう。

私は女になりたいの！

そつ…、ただの女の子に。

「遅えぞ、ブス！」

高2の4月、始業式。

仁が家の前で待っていた。

何で？…どうでも良いけど。

私が無視して横を通り過ぎると仁は舌打ちした。

「おい！聞いてんのか！？」

「うるさいな、聞いてるよ！」

「お前覚えてるか？今日は白の誕生日だぜ。」

あ。

忘れてた……。

「覚えてるに決まってるでしょ！」

「……忘れるなんて最低な奴。」

ふ…んだ。

私の誕生日をいつも忘れるあんたに言われたくない。

私たちは学校に続く道をゆっくり歩いた。

「で、それがどうかしたの？」

「放課後、迷い丘に集合な。白にも言っとけよ！」

迷い丘つてのいうのは、

小さい時からの私たちの遊び場所で、夕日が綺麗な小高い丘。

迷子になる子どもが多いから迷い丘って名前がついたらしい。  
だから人も少ないの。  
私は良いとこだと思うけど。

しばらく歩くと校門が見えてきた。

はあ…

今日の学校は憂鬱。

教室に行く前に体育館に行かなくちゃ。

クラス替えの張り紙が掲示されているはずだから。

「何ため息ついてんだよ？」

「ん…？クラスどうなるかなあって。」

はあ…。

みんな一緒にいいな。

ずっとみんなバラバラのクラスだったし。

1度も全員そろった事ないなんて、やっぱり寂しいから。

「またみんなバラバラだと嬉しいんだけどな！」

「……なんで？」

「なんでって…。お前らと一緒になんてうぜえ！」

「最低！死ね！」

「ああ？？！てめえ！！なんなんだよ！」

何さ…人がせつかく、一緒になりたいって思ったのに。  
泣きなくなってきたな…。

「何騒いでんだよ…うつせえ奴ら。」

「あ…白！おはよ。」

「おはよ…狛。」

言い忘れてたけど、私は狛！

竹馬 狛。（ちくば こま）

「白もバラバラが良い？」

「……どうでも良いだろ。」

ただ、仁とは離れたい。」

「私もおゝ」

「お前らなあ！！！」

なんとか言ってるうちに体育館についちゃった。

目の前に広がるクラス発表。

思わず目をそらした。

見たくないなあ……。

「「あ。」」

な、何。

なんで2人して声あげるの？

「おい、狛。見てみるよ。」

「残念……。仁と一緒にだなんて。」

え……？

私は目を上げた。

冷や汗が頬を伝った。

「あ……あッ！！！！！」

私が見たのは、2年5組のところにあった、3人の名  
みんな同じクラスだった。

「うげ！」

「最悪。」

「何だよ！喜ばない。」

仁、白に続き、私が言う。

これから始まる、

新しい暮らしに胸を弾ませながら。

……ちょっと待て。

私喜んでいいの？

青春が………！

## 第2話：青い空の下

空が青い。

私の心も蒼い。

「こゝまッ!」

「ああ…藪ちゃん…。」  
「どした?」

この子は藪之谷 和湖。

(やぶのや わこ)

通称：藪ちゃん

「私と一緒にのクラスで嬉しいんでしょあ?」

「藪ちゃんと同じクラスは嬉しいよ。よろしくね。」

私はにつこり笑ってみせた。

藪ちゃんは中学1年の時

引っ越してきた。

その時からの大親友で

本当に気が合う良い子だ。

「ずるうい!私はある?」

「嬉しいに決まってる。」

「えへへ」

この子は橘 たちばな 穂波 ほなみ



通称：ほな

おっとりした性格で

高校に入ってから友達なんだ。

みんなでワイワイ盛り上がってたら、

何か悩んでるのバカバカしくなってきた！

良かったんだよね。

み〜んな同じクラスになれたんだし。

せつかくの昼休みなんだし！

「狛！」

「仁……。」

目の前に仁は立っている。

まさに仁王立ちで。

私は弁当片手に立ち止まった。

「何？」

「お前白に迷い丘の事伝えたのか？」

「……まだ！」

「早く伝えるよ、ノロマ。」

……………は？

こいつ今ノロマって言った？  
ふん…。

「自分で伝えればいいでしょーが！このバーカ！！」

「ああ？！喧嘩うつてんのか？！」

「何よ！」

私は藪ちゃんとはなを引き連れて教室を後にした。

仁はいつもうるさいんだから！

ふだんは弁当を屋上で食べるんだけど  
今日は気分的に中庭で食べることにした。  
私たちは芝生の上に腰かけた。

「いいわよねえ。あのかっこいい阿波来君と仲良いなんて！」

かっこいい…？

ふいに藪ちゃんが目を輝かせて言った。

「そうだよねー！モテモテだしねえ」

「ほなまで…。どこがカッコいいの！うるさい奴。」

「そお？？」

「そう！仁は昔っから騒がしい奴！一直線で、一生懸命で、周りが  
見えてないこともあるし…。」

って、私何言ってるのよ！  
あんな奴良いとこなんて  
無いんだってば。

「幼なじみだもんねえ。ホント羨ましい限りですわ！ねえ、ほな  
！」

「ねえ〜！」

あ、そう……。

周りから見たら、私たちの関係は羨ましいのか。  
2人とも確かにモテてるしなあ。

悔しいけど。

うん。

ホント悔しいけど、かつこいい！

「それに風真君！！クールで優しくて、人気絶大！」

藪ちゃんの目が再び輝いた。

クール…優しい…！？

あの腹黒い白が？

「藪ちゃん、それは違う！」

「何がよ！あんな紳士みた事ないわ。

つて…、あれは風真君…？

と、一緒にいるのは

女あああ？？？！」

え、白と女…？

うわぁ。

あれはまさしく、青春！

白が告白されてる。

良いなぁ～！青春だなぁ～！

あれ…。

女の子が走り去って…

え？

「白ッ！もつたいない事を…！！」

私は思わず白の元にかけよった。

白は意味ありげにほほえんで、座った。

「どうかした？ 狛。」

「どうかした！」

「まあ座りなよ。」

「え？ あ、うん。」

私は白の横に腰掛けてうなだれた。  
だいたいズルいんだよ？

私なんて告られたこと無いし…。  
それなのにいつも2人はさ。

「ご用は何でしょう？」

「あのさ、何でふつちゃうの？」

「何で付き合わなきゃなんないの？」

「え？ だって… 憧れない？ 青春だなぁって思わない？」

「好きな人だったらね。 狛は青春したいの？」

「したあい！」

青春したい！

恋愛したい！

いっぱしの女になりたい！

「狢…、俺狢のこと好きだよ。ずっと昔から…」

……え？

え、ええ……？

白今なんて…

「嘘ッ?!」「そう、嘘。よく気付いたね。青春味わえた？」

「はーくーッ!!死ね!!殴り殺してやるわ!」

私は白に殴りかかった。

「ははは。ごめんごめん!」

「許さん!…と、言いたいところですが、思い出した。」

また忘れてた。

仁に今度ばかりは殴られるとこだったよ。

「放課後迷い丘に集合ね。」

「ん。わかった。」

「じゃ、私友達待たせてるから!」

「おう。」

ああ感じる。

藪ちゃんとはなの輝いた視線が。

「ただいま。」

「風真君なんて？」

「好きな人となら青春したいって。」

「と言うことは、好きな人いるのかしら？」

「ズキッ

好きな人いるの？

私には教えてくれないの？

仁も知ってるのかな。

私たちの仲は隠し事無しなのに。

「こゝまッ！チャイム鳴っちゃうよ。行こー！」

「う、うん。」

白の方をチラッと見てみた。

もう白はいなかった。

なんだか今日は悩み事が多い日だわ。

放課後も嫌な事が起こるような

予感がするんだ。

第2話 完。



### 第3話：夕日の丘で

チャイムが鳴った。

ついにきた放課後。

私たちは部活に入っていない。

私はソフト部が無かったから。

白はめんどくさいから。

仁は手首を怪我して以来、部活をやめちゃった。

だから、みんな一緒に迷い丘に行くんだと思ってたのに。

チャイムを聞くやいなや

仁は走って教室を出て行った。

白と私は目を見合わせて首をかしげた。

「どうしたんだろ。」

「さあ。俺たちも行こう。狼、乗ってくだろ?」

「うん！乗ってく！」

白はいつも自転車で来る。  
めんどくさいんだって。

「狛あゝ！」

「ほな？どうしたの？」

教室を出ようとしたら、  
掃除当番のほなが泣きそうになりながら駆け寄ってきた。  
何事だろう。

「む、む、虫がゝー！！」

虫？

なんだ、たかが虫かー。

「どこ？」

私はほなが指さした方に出向き

軽く1撃で虫を殺した。

「はい！もう大丈夫だよ。」

「さすが狛あ！かつこいいゝ！」

「…ありがと。じゃあね。」

…… かつこいい、か。

喜ぶべきところかな？

「ほら、狛 行くぞ。」

「うん。」

自転車の荷台にまたがって

気持ちいい風を感じながら迷い丘を目指す。

気付けば、もう空がオレンジ色になっていた。

「ねえ！」

「ん？」

「空、キレイだね！」

「そうだな。」

「白、誕生日おめでとつ。」

「…ん。ありがとう。」

迷い丘の頂上についた。  
仁の姿が見当たらない。

パンパン！！！！！！

「うわッ。ビックリした…！」

「仁、何やってんの？」

「にひひ」

仁が後ろからクラッカーをならし、振り向いたそこには…

パーティーの用意がされていた。

「白、誕生日おめでとう！」

「どうゆう風の吹き回しだ？仁が俺の誕生日を祝うなんて。」

「おう！ちよつとな。」

「……？」

凄いッ！

仁が白をこんなに祝ってるのは、初めて見た！

盛り上がって

盛り上がった

すっかり夜はふけた。

「おいお前ら。俺へのプレゼントは？」

「プレゼントかあ。何が欲しい？」

事前に用意してなかった私は、今更ながら聞くことにした。

「そうだなゝゝ。」

「白、俺からのプレゼントは……、宣戦布告だ！」

「……………は？」

「俺は狛がすんげえ好きだ！…てめえには譲らねえ！」

……………。

「またまたあ！仁、何言ってるの？ホント馬鹿なんだから。」

「そっか、なるほど。だからこんなに祝ったわけか。」

……………え?????

何納得してるの？

「俺だって、狛が好きだ。嘘じゃないぜ、狛。」

「な、何言って…」

白まで馬鹿な事言って！

2人ともどうしたって言うの？

「やっぱりな。白、お前とは敵だ。大嫌いだ。」

「仁、お前の事は元々嫌いだった。」

「うつせえ！…でも、今日は譲ってやる。お前が狛を送れ。」

「当たり前だろ。」

私はおずおずと荷台にまたがった。

なだらかな傾斜をゆっくり下る。

「本気だから。」

白が静かに言った。

「……………」

嘘だよって言ってほしい。

「ごめんな。今の関係でいたかったんだろ？」

「…………。」

「だから俺たちは、今まで我慢してた。」

「……………え？」

「俺も仁も、好きになったのは狛だけだよ。」

「……………。」

「ごめんな。」

それ以外、白は喋らなかった。

家の前について、背中じゃなくて白の顔を見た。

なんだか白じゃないみたい…。

「ありがとう。」

「おう。ゆっくり、考えな。」

「…うん。ありがとう。」

「じゃあな！」

白と別れて家の中に入った。

そしてベットに崩れるように倒れた。

仁も白も…、私が好き？

私は2人のこと……………

好きだけど

この好きは、幼なじみとして…？

よくわからない。

わからないよ……………。

第3話      完



#### 第4話：朝日と共に

眠れない。

頭上の時計に目をうつして、時刻を確認した。

明け方の4：30だ。

私はどうしたら良いの…？

好きだよ。

好きだけど…。

愛してる？

……どっちを…？

本当に……？

頭を抱えていると、部屋の窓からコツツと音が鳴った。

雨…？

狛は窓を開けた。

空は白くなりだしていた。

もう朝かぁ。

……ま……。

……………「こ……ッ！」

……………「こまッ……！」

「え？」

「「狛ッ……！」」

「えッ……！？……仁ッ、白ッ！何してるの？」

「しーッ……！」

あ、今はまだ4…30だった。

「おりておいでよ！」

「う、うん。」

狛は音を立てないように、そつと家を出た。

「狛、おはよ！」

「おはよ、白。何してるの？」

「狛の事だから、頭抱えて、寝れないんじゃないかと思って。」

さすが幼なじみ…。

まさにその通りだよ。

狛ははにかんだ。

「だから俺たちが、わざわざ様子見に来てやったんだ。」

「わざわざって…隣の家だし、それに仁たちのせいだから！」

そうだよ！

これも全てこいつら2人のせいだ！

なんかイライラしてきたッ！！！！

「んでさ、今から」

「殴らせる…！」

「は？」

「お前ら殴ってやる！」  
バキッ

え…？

「いつてえ〜」

「何殴られてんの？」

いつもは避けるくせに。

狛は頬をさする2人を見て、キョトンとした。

「狛…グーは酷いんじゃない？」

「だって！何でよけないのよ…！」

「今日は殴られようと思って来たからね。」

……………え？

白…？

どついう発言…？？？

頭おかしく……

「なつてねえよ！」

「仁、心を読むな！」

「いや、顔に書いてあるから。」

狛は顔を手で覆った。

「とりあえず…迷い丘行こっか。」

「おい狛、後ろ乗れ。」

「その前に、はい、これ着て。春でも、さすがに朝は寒いよ。」

「あ、うん。ありがと…。」

空もだいぶ明るくなって、時刻は5:00。

狛は白の上着を羽織り、仁の自転車の後ろに乗った。

迷い丘につくまで

3人とも言葉を発しなかった。

「…ついたぞ。」

仁が自転車を止めた。

「ねえ…覚えてる？」

前にも3人でこんなに朝早く、ここに来たよね。」

「確か…小学校4年の時だったっけ。」

白がにっこり笑った。

「んな事あったか…？」

「仁の記憶力は小学生以下だな。」

「なんだと?! 白、てめえ…」

「私、あん時は2人とも嫌いだった。」

「「……………え??」」

「だって、喧嘩ばっかうってくるし。」

「「そ、それは…」」

2人は好きな子には素直になれなくて、イジメてしまうタイプの子供だった。

狛にとっては、最低な奴らという認識だったが。

「でもね、2人という時は心地良いの。  
嫌いだった時もね。」

だから……

どっちかを選べない。

私卑怯者だから

2人とも愛してるもん！」

ごめんね、と付け加えて狛は俯いた。

2人が離れていくなんて

想像もしたくない！

「狛、顔をあげなよ。」

「そうだ！この俺様がそんな事で諦めると思っつか？」

「どっちも愛されてるなら、まだ望みはある。俺も諦めないよ。」

2人とも……！

狛は顔をあげた。

「ありがとう…ッ！」

2人は狛の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「うーっし、帰るか！」

「じゃ狢、俺の後ろに乗りな。」

「おい！今日は俺に譲るってさっき…！」

「うん。だからさっき譲っただろ？」

「なッ！てめえ…ッ」

「ふ…あはははは！」

馬鹿じゃないの？」

「うつせえ！」

「私、歩く！久しぶりに。」

「それじゃ、お供しますか。」

「うん！」

3人の影が太陽に照らされ長くのびる。



こうして明日も来年も

願わくば、

これからずっと

一緒にいられますように。

君とあなたと私の間から

完。

#### 第4話：朝日と共に（後書き）

初小説という事で

ぐだぐだ感がありますが。

この話はただたんに  
恋より友情  
と言いたかっただけ。

そのうち、番外編を書こうと思います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3786c/>

---

君とあなたと私の間から

2010年12月11日03時13分発行